

夢へ 向かって 04

意志あるところに道は拓ける。
意志ある者こそ道を拓くことができる。
高潔な志と熱い使命感で
未来を切り拓く人のビジョン、
その深淵をのぞく。

映画監督

緒方 篤

Atsushi OGATA

映画『脇役物語』で原案・脚本・製作・監督を務めた緒方篤氏。
今こそ国際的な注目を浴びるアーティストだが、かつて
富士通でソフトウェア開発に携わっていたこともある。
映画監督という天職を得るまでの道のりや創作の源泉について話を聞いた。

笑いと温もりを伝える ボーダレスな映画監督

万年脇役俳優が主役に!? 海外でも高評価のロマンティック・コメディ

東京・渋谷の取材現場でカメラを見つめながら、「来週にはまたアメリカへ戻ります。忙しくて」と笑った。中学時代から大学院までニューヨークとボストンで過ごし、10年以上前からはオランダやドイツ、米国で映像作家やコメディ俳優としても活動してきた。1年の半分以上を海外で過ごす映画監督、それが緒方篤氏である。

映画『脇役物語』で原案作りから脚本執筆、製作、監督、そして出演までこなした。日本の実力派俳優たちを中心に起用し、舞台も日本。ストーリーは、万年脇役俳優の主人公ヒロシが大物劇作家の父や新人女優らとの間で揺れ動きながら、少しずつ自分の道を見定めていくというものだ。とはいえ、ウエットさや重苦しさは全くない。軽やかな雰囲気や展開のテンポのよさ、細部にちりばめられたユーモアなど、緒方氏らしい欧米仕込みのセンスが冴えるロマンティック・コメディに仕上がっている。

この映画の特徴の1つは、製作スタッフが各国から集まっていることだろう。例えばオープニングとエンド・ロールのアニメーションはオランダ人デザイナーの手によるもの。棒線画の人物が東京を駆ける様子を和紙のような素材感で描いているのだが、ヨーロッパのエスプリを感じる、なんともお洒落な作品となっている。これはロサンゼルスでのアクション・オン・フィルム国際映画祭で最優秀オープニング・アニメーション賞を受賞した。音楽はハリウッドでも活動する女性作曲家が担当し、そのうえ一流の演奏家たちによる生演奏というから贅沢極まりな

い。ロマンティック・コメディに優雅さと気品を添えている。さらに、製作資金も9ヵ国、20人以上の個人から出資協力を取り付けた。「これまでの作家活動や海外経験で培った人脈が今回の映画に活かされています」と緒方氏は説明する。

撮影現場では演出も欧米流だった。「例えばカメラを回す前に役になりきったつもりで役者さんにインタビューしたり、脚本にないシーンを即興で演じてもらったりしました。こうするとより自然な演技になる。海外では一般的な手法です」。監督の狙い通り、いやそれ以上に、例えば代議士の妻を演じた松坂慶子さんは監督自身も見とれるほどの素晴らしい演技を披露したという。そういうご本人も脇役で登場。意外な場面にひょっこり顔を出す軽妙な演技が見ものだ。

今年10月の公開以降、『脇役物語』は多くの観客に支持されてノベライズまでされた。海外でも注目を浴び、上海、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコなどの映画祭で高い評価を得ている。

作品にユニークな個性を持たせるには “自分”を盛り込むこと

それにしてもこの緒方氏、とにかくよくしゃべる。しかもかなりの早口だ。そして次々と繰り出される話題がどれも楽しい。栗色の瞳は絶えず冗談を探しているようでもあり、実際に取材現場にはたびたび笑いがあふれた。まさにコメディ俳優の面目躍如だ。

歯切れのよさ、テンポのいい語り口、随所にのぞくユーモア——これはまさに『脇役物語』の魅力そのもの。緒方氏自身、「作品にユニークな個性を持たせるには“自分”を盛り込むのが一番いい。僕らしさが出ていなければ誰が作ってもいいわけだし、それこそ機械が作ったっていいわけですからね」と話す通り、『脇役物語』はフィクションで

Text:Yoshie Kaneko
Photograph:Yukio Yoshinari



中学時代、家族とグランド・キャニオンにて。んにトイレの場所を聞かれたり、注文を受けたりするんですよ(笑)。

父子関係も自身のそれを反映させた。「父とは毎日親子漫才をやっている感じなので、そういう部分での面白さは意識しました」。作品の中では、気は優しいが生真面目なヒロシと、そのヒロシを半人前扱いする陽気で大らかな父・健太が互いを気遣いながらもけなしあう様子が絶妙で、ほのぼのとした笑いを誘う。

さらに、その健太の劇作家としての社会的地位の高さや、家を空けている母が海外で活動中という設定も緒方氏自身の家族関係を連想させる。緒方氏の父は元日本銀行理事の緒方四十郎氏、母は国際協力機構(JICA)理事長の緒方貞子氏。

先祖には犬養毅(高祖父)や初代自由民主党総裁の緒方竹虎氏(祖父)がいる。こんなそうそうたる顔ぶれの中では、誰でも「脇役」になるかもしれない。

私生活で人違いされ、仕事でも万年脇役俳優として漫然と暮らすヒロシは存在感の薄さにコンプレックスを抱いて「自分は一体誰なんだろう」「何になればいいだろう」と自問するが、それもまた緒方氏のかつての姿に重なるだろうか。思春期の真っただ中にアメリカ文化に放り込まれて以来、「自分はどこに属する人間なんだろう」と思い悩んだ時期もあったという。仕事に誇りを持ち、全力を注ぐ両親のそばで不完全燃焼のまま悶々とする日々。「なりたい自分」がつかめない自分。映画監督という天職に巡りあえなかったら、もしかすると今もまだ「自分探し」をしていたかもしれないという。

ハーバード大学1年のとき、寮の前で。

心地よさを感じ取る感性こそ 他の誰にも真似できない自分特有のもの

緒方氏が視覚表現に目覚めたのはニューヨークの高校時代。父がカメラを買ってくれたことがきっかけだという。「筆みたいにいろんな表現ができるのが面白い」とのめりこみ、やがて8ミリカメラを手に入れて動画の世界にも足を踏み入れた。しかしカメラはあくまで趣味と考え、ハーバード大で哲学や経済学、コンピュータサイエンスなどを学んだ後、富士通に就職。オンライン手書き文字認識のソフト

富士通に入社したばかりのころ。



開発に従事することになった。

「書き順で文字を認識する仕組みなんですけど、僕は書き順が正しくないから初めは自分の名前も認識されなかった(笑)。でも研究内容が特殊なだけに仕事は面白かったですよ。周りでも音声認識とか身体障害者も使えるコンピュータ・インターフェースの研究とか、時代の先端を行く開発をしていた。刺激的な職場でした」

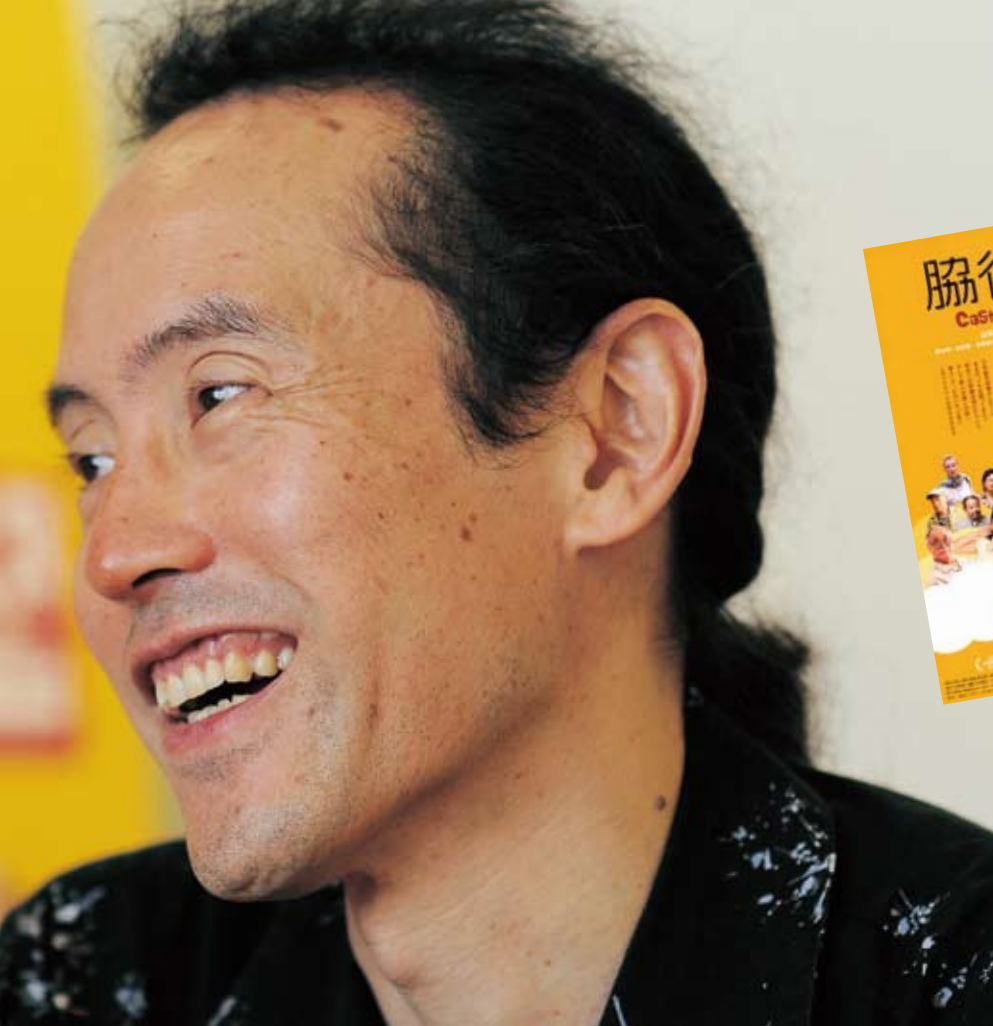
しかし、心の中では創作への意欲がふつふつと湧いていた。撮り溜めた写真は友人の間で評判を呼んでいたし、週末には水墨画教室にも通う日々。やりたいことがやれないストレスから、じんましんまで出た。「このままではいけない」と感じた緒方氏は休職し、MITの大学院でビデオアートを学んだ。膨大な量の映像を撮り続ける日々の中で、少しずつ作風が確立されていったという。

「見ていてリラックスできるもの、心地よいものを作りたかったし、そういう思いに忠実に作ったものほど評価が高かった。そこで初めて、美しさや心地よさを感じ取る感性の部分こそ僕特有のものであり、それが僕の作風なんだと分かったんですね」

目の前にある情景や出来事のどこを切り取り、どのようにカメラに収めていくか。その選択眼と演出の妙こそがクリエイターの腕の見せ所であり作風といえる。技術さえあれば誰でもそれなりの作品を作ることにはできるが、その人にしかできない表現ができるからこそクリエイターとしての価値がある。その価値を、すなわち表現者としての個性を緒方氏はつかみとったのである。そして自分の本当にやりたいこと、進みたい道は映像の世界だと見定めたのだ。

こうしてMITを修了後、富士通に復職し、花の万博推進室に所属して画像認識や画像処理の技術を応用した意欲的な作品を生み出していった。しかしクリエイターとして独立し、感性を生かした仕事を





『脇役物語』(Cast Me If You Can)

万年脇役俳優のヒロシ(益岡徹)に映画主演の話が持ち込まれるが…。出演:益岡徹、永作博美、津川雅彦、松坂慶子ほか/原案・脚本・製作・監督:緒方篤/脚本・キャスト:白鳥あかね/製作:ニアリ・エリック/プロデューサー:宮川絵里子/エグゼクティブ・プロデューサー:ニアリ・バラジ/共同プロデューサー:櫻井陽一/撮影:長田勇市 JSC/編集:大永昌弘/ヘアメイク:小堺なな/音楽:ジェシカ・デ・ロイ/配給:東京テアトル
<http://www.wakiyakuthemovie>

したいという思いは日増しに高まり、MIT時代の先輩からドイツの美術アカデミーに客員作家として誘われたのを機に退職。「ドイツ語を勉強する間もなく飛行機に飛び乗りました」と述懐する緒方氏に「すごい行動力ですね」と思わず感嘆すると、「やりたいことに向かって突き進むしかなかったんですよ」。結果的にそれは自分探しを終えるための旅立ちとなった。ひょうひょうとしたたずまいの中に、目標へ向かって突っ走る人並み外れた行動力と情熱を秘めているのだ。

観る人が希望を持ってくれたらうれしい

海外で活動が続けるうちにテレビ・映画業界の人々と知り合い、番組出演や脚本執筆の依頼が舞い込むようになる。やがて自分でもストーリー性のある映像作品を作りたいと思うようになった。そして2006年、詐欺師と老女のかげあいをユーモラスに描いた短編映画『不老長寿』を発表すると、ニューヨーク近代美術館(MoMA)とリンカーン・センター共催の「ニュー・ディレクターズ/ニュー・フィルムズ映画祭」で日本から唯一入選するなど、国内外で評判に。映画界における新しい才能の誕生であり、緒方氏にとっては映画監督という天職との出会いでもあった。そして4年後、満を持して発表した2作目が初の長編映画『脇役物語』というわけだ。

『脇役物語』が単に面白おかしいだけのコメディでないのは、緒方氏のたどってきたこうした道のりが背景にあるからだろう。『脇役物語』には現代のひずみや不条理も描かれている。

「厳しい状況の中で人々が時に誤解や衝突をしながらも、つながりを持つことで温かいものが生まれていく。そんな情景を見せることで、観る人が希望を持ってくれたらうれしいですね」

同時に、かつての自分と同じように役割を求めて思い悩んでいる人へ向けてこんなメッセージも込めた。「型からはみ出していたって、周りとは違っていい。自分らしくいればいいんだ」と。さらに、富士通時代の同僚を含めた、映画作りを支えてくれた人たちには端役として登場してもらっている。このエピソードからは「必要とされない人はいない。どんな人も誰かを支え、誰かに支えられている」という緒方氏の思いも感じられるだろう。

観る人に笑いと生気を与える映画監督・緒方篤。次回作は海外を舞台にした犯罪コメディを構想中という。世界を翔けるアーティストが次にどんな物語を紡ぐのか、期待はふくらむばかりだ。



おがた あつし 米国ハーバード大学卒、富士通に入社。退職し、マサチューセッツ工科大学院卒。復職後、富士通花の万博推進室に在籍。ドイツのKHMメディア・アート・アカデミーに客員作家として招待され、退職。以後、映像作家・脚本家、俳優、監督として、ドイツ、オランダを中心に活動。米国、日本でも発表。『脇役物語』は、上海、カリフォルニア、ニューヨーク、インドなど多数の海外映画祭に入選。音楽とアニメーションはロサンゼルスで受賞。10月からの全国順次ロード・ショーに続き12月にはサンフランシスコでも劇場公開。小説版は竹書房より出版。